



声をかけることから始まる 多様性尊重への第一歩

先日、敷島小に特別なお客さんをお迎えしました。視覚障害をおもちの白濱さんと、盲導犬のダスティーです。白濱さんは大人になってから視覚を失いましたが、とても前向きで明るく、話を聞いているだけで元気をもらえる方でした。地域で、白濱さんがダスティーと散歩をしている姿をよく見かけます。私はこれまで、「自分のペースで歩いているから、そっとしておいた方がいいのかな」と思っていました。けれど、白濱さんのお話から、それが間違いだったと気づかされました。

白濱さんは、「声をかけてもらえるのが一番うれしい」と話してくださいました。日本人は“奥ゆかしさ”から遠慮してしまうことが多いけれど、実は「こんにちは」や「お手伝いしましょうか?」といった小さな声かけを、心の中では待っている人がたくさんいるのです。



相手に声をかけ、話をしてみることで、はじめてその人のことを知ることができます。どんな思いを抱えているのか、何に困っているのか。話してみなければ分からないことが、そこにはたくさんあります。相手を知ること、寄り添うことができる——それが“思いやり”の始まりです。

多様性を尊重するというのは、ただ「違いを受け入れる」ことではありません。見えない違いにも気づこうとすること。そして、「あなたを知りたい」という気持ちを、声や行動で伝えていくことです。

世の中には、目には見えないけれど、さまざまな背景や事情を抱えて生きている人がいます。困っていること、悩んでいること、不安に思っていること、悲しみ、苦しい…、誰にも言えず、抱えていることもあると思います。それでも、それぞれの違いの中で、誰もが懸命に生きています。見えないからこそ、

知ろうとすること。そして、知ること
で寄り添い合えることが、多様性を尊重する第一歩です。



「声をかける」ことから生まれるつながりが、私たちの学校や地域を、もっとあたたかい場所にしていきます。白濱さんとダスティーの姿は、その第一歩を私たちに静かに教えてくれました。



学校 HP